

「赦しを得る者」

ルカによる福音書

第18章 9節～14節

説教 岡村 恒 牧師

神殿に上って行って神に祈りを捧げ、神に義とされて家路についた者がいる。主イエスがたとえ話で語られたのはそういう人のことです。

神の民、ユダヤ人は、律法に従って神殿に上り、礼拝をささげ、神に近づいて生きることを大切にされた人々です。律法の冒頭には、まず神に愛され、神に救い出された出来事が記されています。ですからユダヤ人は、神に愛された者として、律法を守って神に喜ばれて生きていきたいと願ったのです。

〈ファリサイ派の人〉というのは、厳密に律法を守ろうとして、他の人々とは違う生き方をした人々です。ファリサイという言葉は、分離するとか区別するという意味を持っていました。他の人とは違う仕方、徹底して律法を守り、誰よりも神に近づいて生きようとしていました。

ですからファリサイ派の人は、神殿の外側の異邦人の庭からどんどん中に入って、一番神に近いと思われる内側で祈りました。それに対して徴税人は、神殿の庭の隅の方に立っていたでしょう。徴税人は、当時ユダヤを支配していたローマ帝国の手下となって、時には本来の金額以上の税金を不正に取り立てたりしていました。ザアカイという人の物語を見ると、「不正なとりたて」が珍しくなかったであろうことが見て取れます。(ルカによる福音書19章)ですから徴税人は同胞のユダヤ人からは忌み嫌われていました。神の民に背を向け、神に捨てられた人だと思われていたのです。

私たちはお互いの間に平和を造り出すことに、いつも失敗をしてきました。お互いが、自分の正義を振りかざしてぶつかるからです。今日、何が善であり、何が悪なのかがいよいよ不明確になり、混乱は深まっているように見えます。

当時、ファリサイ派の人は自他共に「善」の、徴税人は「悪」の代表でした。ですからファリサイ派の人は、その心の中で喜んで神に感謝の祈りを捧げました。自分が他の人たちと違って、何を喜んでいて、何を喜んでいるかを喜んでいます。多くの人々が十戒に反して人から奪い、不正を行い、姦通の罪を犯しているのです。さらに彼は、自分が徴税人のような、神に捨てられた者ではないことを心から感謝しています。

律法の多くの定めを守ることを、ユダヤ人は大切にしてきました。たとえば、金曜日の日没から始まる安息日の定めを守ることを、今日で

も徹底して守ります。何とかして神に喜ばれる存在でありたいと願っているからです。

ファリサイ派の人は、自分がどれほど善であり、どれほど神に近い存在かという喜びに心が震えています。自分のためだけではなく、他の人のために断食をし、徹底して捧げものをするような人だったのです。律法の規定以上のことをしながら、苦しみよりも大きな喜びを味わっていたのだらうと思います。

ところが徴税人は、自分が罪人であることをよく知っていました。他の人たちも、この徴税人に激しい非難のまなざしを向けていました。神殿に近づくことさえ、本来ならばはばかれることだと思いました。この神殿に上って来て、神に呼びかけて祈る資格などない、そう思いながら、それでも、どうしても祈らずにはいられなかったのです。何としても神殿で、神に祈ること無しにはもう一歩も歩むことなどできなかったのです。ですから深い悲しみを抱いて、この徴税人は祈ったのです。

自分が正しい、義とされるはずだと思い込んでいるファリサイ派の人と、ただ神の憐れみにすがりつく徴税人を描き出して、主イエスは言われました。「言うておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。」(14節)赦されるはずのない者が義とされる。ここに、神がいったいどういうお方か、どれほど私たちを憐れみ、罪を赦して下さるお方かが、はっきりと描かれています。

ただ神の憐れみだけが、この私を義として、赦しを与え、命を与えて下さるのです。神の前に立つ資格がなく、神に呼びかけることも、神に語りかけられることもあり得ないこの私を、神は憐れんで下さるのです。自分が、神との関係を失ってしまった罪人であることを知り、悲しみ、神の憐れみにだけすがりつくしか無い者を、神は知っていて下さるのです。神から遠く離れた場所で、ただ神にだけ望みをかける者を、神は招き、祈りへと導いて下さるのです。

今この礼拝に、私たちが招かれているのは、ただ神の深い憐れみによります。神が私たちを求めて下さったからです。ここで、罪を悲しむ者として憐れみを受け、命を注ぎ入れられて新しく生き始めるためです。ここで私たちに信仰を与え、歩み出させて下さるのです。

(記 岡村 恒)